

## 扁平上皮乳癌の1例

東京女子医科大学 第二病院外科 (指導: 榊原 宣教授)

|      |      |      |       |       |       |
|------|------|------|-------|-------|-------|
| マツモト | ノリオ  | カジワラ | テツロウ  | ハガ    | シュンスケ |
| 松本   | 紀夫   | 梶原   | 哲郎    | 芳賀    | 駿介    |
| ハガ   | ヨウコ  | シミズ  | タダオ   | ホソカワ  | トシヒコ  |
| 芳賀   | 陽子   | 清水   | 忠夫    | 細川    | 俊彦    |
| ナカジマ | ヒサモト | マキタ  | マスジロウ | サカキバラ | ノブル   |
| 中島   | 久元   | 蔦田   | 益次郎   | 榊原    | 宣     |

東京女子医科大学 第一病理学教室

トヨダ チサト  
豊田 智里

(受付 昭和60年2月16日)

## はじめに

乳癌は近年急速に増加し、臨床的、病理学的に多方面から研究がなされているが、その乳癌のなかでも扁平上皮乳癌はきわめてまれなものである<sup>1)</sup>。今回われわれは、37歳女性の右乳房に発生した扁平上皮乳癌を経験したので、その取扱い方、および組織発生などについて若干の文献的考察を加えて報告したい。

## 症 例

患者: M.Y. 37歳, 女性, 主婦。

主訴: 右乳房腫瘍。

既往歴: 27歳時, 前置胎盤で子宮全摘術をうけている他, 特記すべきことなし。

家族歴: 特記すべきことなし。

生活歴: 初潮13歳, 結婚25歳, 妊娠1回。

現病歴: 昭和56年10月, 右乳房の腫瘍に気付くが放置していた。57年1月頃より腫瘍の増大傾向を認め, 5月25日当科初診。6月15日入院となった。

現症: 体格栄養中等度。胸・腹部に異常所見を認めない。局所所見で右乳輪下に5×7cm大の弾

性硬、一部波動性のある腫瘍が触知された。腫瘍は可動性で、表面は凹凸不整であったが、境界は鮮明であった。腫瘍と乳頭、乳輪および皮膚との癒着は認められず、発赤、陥凹なども認められなかった。また腋窩、鎖骨上窩リンパ節は触知されなかった。

入院時検査所見: 表1のごとく、特記すべき所見はなかった。入院後施行した穿刺吸引細胞診で約20mlの血性液を採取、細胞診でclass IIであった。6月16日、excisional biopsyを施行した。

摘出標本: 腫瘍の大きさは4×6×4cmで腫瘍

表1 入院時検査所見

|                            |       |           |
|----------------------------|-------|-----------|
| 血液所見                       | K     | 4.1mEq/l  |
| RBC 392×10/mm <sup>3</sup> | Cl    | 98mEq/l   |
| Hb 12.8g/dl                | Ca    | 9.4mEq/dl |
| Ht 33%                     | 肝機能検査 |           |
| WBC 7300/mm <sup>3</sup>   | GOT   | 19KU      |
| 血小板22.8×10/mm <sup>3</sup> | GPT   | 18KU      |
| 出血時間 4分                    | ALP   | 30KAU     |
| 凝固時間 10分                   | LDH   | 293 IU/l  |
| 電解質                        | LAP   | 146GRU    |
| Na 136mEq/l                | T.ch  | 229mg/dl  |

Norio MATSUMOTO, Tetsuro KAJIWARA, Shunsuke HAGA, Yoko HAGA, Tadao SHIMIZU, Toshihiko HOSOKAWA, Hisamoto NAKAJIMA, Masujirou MAKITA, Noburu SAKAKIBARA [Department of Surgery, Tokyo women's Medical College Daini Hospital (Director: Prof. Noburu SAKAKIBARA)], Chisato TOYODA [Department of Pathology Tokyo Women's Medical College]: A case of squamous cell carcinoma of the breast

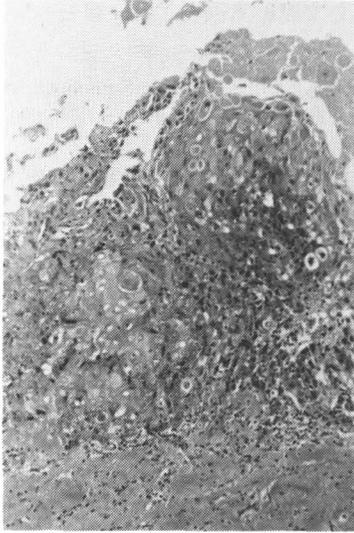


写真1 (対物 ×10)

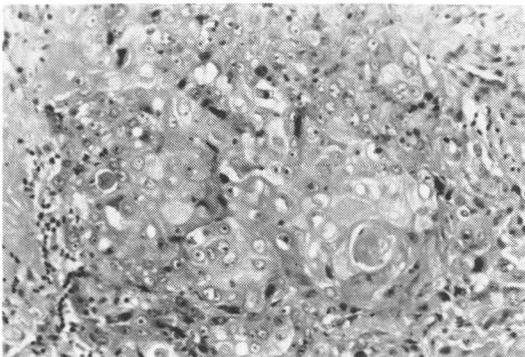


写真2 (対物 ×20)

剖面は灰白黄色を呈し、中心は嚢胞状となり壊死組織が含まれていた。周囲の乳腺組織、脂肪組織とは明確に境界され、皮膚への浸潤は認められなかった。

**病理組織所見：**嚢胞状になった壁には異型の強い表皮類似の層構造のある癌蜂巣があり、一部で基底膜の残存が認められ、内腔に面した側は壊死に陥っている(写真1)。癌蜂巣を強拡大像で見れば、細胞質が大きく、好酸性で核小体の著明な癌細胞が認められる。核は不整形で大小不同が著しい。隣接する細胞間には、いわゆる細胞間橋が認められ、癌蜂巣内には、癌真珠も確認される(写真2)。癌細胞周囲乳腺組織には好酸球、好中球を

主とした炎症性細胞浸潤のほか、閉塞性腺症や線維腺症など乳腺症の所見を伴っていた。

**診断：**右扁平上皮乳癌

**手術：**6月20日定型的乳房切断術施行。廓清リンパ節に転移は認められず、組織学的 stage は t2 n0 m0, stage I であった。

**術後経過：**術後補助療法として術後2週目よりブレオマイシン90mg, OK432 2.0KE/週, テガフル600mg, PSK 3.0g 連日投与, 術後2年の現在再発は認められていない。

### 考 察

乳腺の扁平上皮癌は比較的まれな組織型であり、わが国の乳癌取扱い規約によれば、扁平上皮化生を伴う癌で、癌蜂巣が単に重層を示すだけでなく、角化あるいは細胞間橋のみられるものを扁平上皮乳癌と定義している<sup>2)</sup>。1936年、Paster-nack & Wirth<sup>3)</sup>が扁平上皮乳癌を報告して以来、扁平上皮化生を伴った腺癌、乳腺近傍の上皮より発生した扁平上皮乳癌、転移性のものなどではない、いわゆる真の扁平上皮乳癌(pure squamous cell carcinoma of the breast)ともいうべきものがまれながら報告されている。

乳腺に扁平上皮化生が発生することは時折みられ、正常乳腺に何らかの刺激があった場合(例えば、壊死組織や嚢胞周囲、エストロゲン刺激域下、および妊娠中のfibroadenoma, cystic mastitis complex など)に扁平上皮化生はおけるといわれている<sup>1)</sup>。また乳癌、とくに髄様腺管癌、面癌癌などの一部には扁平上皮化生がおこることがあるとの報告<sup>4)</sup>もあり、乳腺における扁平上皮化生は、それほどまれではないと考えられる。Fisher<sup>5)</sup>によればinvasive ductal carcinomaの3.6%に扁平上皮化生巣が認められたという。

自験例の場合扁平上皮化生巣はなく、腫瘍部は、扁平上皮癌より構成されており、上皮との関係、あるいは転移性のものなどが否定されることから、いわゆる真の扁平上皮乳癌と考えられる。いわゆる真の扁平上皮乳癌は非常にまれで、本邦での報告は、自験例の他われわれの調べた限り、菅野ら<sup>6)</sup>、土屋ら<sup>7)</sup>の報告をみるにすぎない。この組織発生に関しては、腺癌の扁平上皮化生巣を発生

母地とする考え方<sup>9)</sup>と、扁平上皮化生といった過程を経ることなく、扁平上皮癌そのものが乳腺上皮から発生し得る<sup>9)</sup>といった2つの仮説がある。また土屋ら<sup>7)</sup>は詳細な病理組織の検討から、癌化の時点で腺癌, intermediated cell, 扁平上皮癌の3者に分化し、終局的には扁平上皮癌が腫瘍の主座を占めてくると考えている。自験例の場合一部で囊胞壁の残存が認められることから、扁平上皮化生巢はないが、囊胞の刺激による乳腺組織の扁平上皮化生巢を発生母地とした扁平上皮乳癌と考えられる。

臨床的に、扁平上皮化生を伴う腺癌、およびいわゆる真の扁平上皮癌をまとめてみると、発生年齢はMcDivittら<sup>10)</sup>のいうように年長者に多いとする報告もみられるが、平均49歳から58歳といわれている<sup>3)11)</sup>。自験例の37歳、菅野ら<sup>6)</sup>、出雲井ら<sup>12)</sup>の25歳、29歳の症例をみても、かならずしも年長者が罹患するものではないと考えられる。発生率についてみれば、扁平上皮乳癌の取扱い上の混乱のため正確には同定し難いが、0.5~2.0%といわれている<sup>13)</sup>。症状および局所所見では他の乳癌に比し、特徴はなく、予後に関しても、CornogらおよびPasternackらは化生の有無によって差がないとしている。

扁平上皮化生を伴う腺癌、あるいはいわゆる真の扁平上皮乳癌のいずれにしても、乳腺組織における扁平上皮細胞の性格を有する細胞の発生、分化に関して、他臓器における研究に比し、十分ではない状況<sup>14)</sup>である。今後、扁平上皮化生を伴う乳癌といわゆる真の扁平上皮乳癌を区別し、詳細な検討を加えていく必要があるように思われる。

#### むすび

いわゆる真の扁平上皮乳癌の1例を経験したの

で、若干の文献的考察を加えて報告した。

#### 文 献

- 1) Cornog, J.L., et al.: Squamous cell carcinoma of the breast. *Am J Pathol* 55 410~417 (1971)
- 2) 乳癌研究会: 乳癌取扱い規約. 第7版 金原出版 東京 (1984) 26.
- 3) Pasternack, J.G., et al.: Adeno-acanthoma salcomatodes of the mammary gland. *Am J Pathol* 12 423~435 (1936)
- 4) Azzopardi, J.G., et al.: Problems in breast pathology Saunders Philadelphia (1979) 297~301.
- 5) Fisher, E.R., et al.: The pathology of invasive breast cancer. *Cancer*, 36 1~85 (1975)
- 6) 菅野 武・他: 扁平上皮乳癌の1症例. 神奈川医学会誌 2 65 (1975)
- 7) 上野真一・他: 乳腺原発の扁平上皮癌の1例. 癌の臨床 29(1) 51~56 (1983)
- 8) Farrando, R., et al.: Epidermoid carcinoma of the breast. *J Surg Oncolo* 12 207~211 (1979)
- 9) Arffman, E., et al.: Squamous cell carcinoma of the breast. *J Pathol Bacteriol* 90 319~321 (1965)
- 10) McDivitt, R., et al.: Tumors of the breast 2nd series. Armed Forces Institute of Pathology Washington (1968) 94.
- 11) Haagensen, C.D., et al.: Disease of the breast 2nd ed., Saunders Philadelphia (1971) 600.
- 12) 出雲井士郎・他: 扁平上皮癌の3例. 日本癌治会誌 9 69 (1974)
- 13) Foot, N.C.: A fatal case of deepest epidermoid carcinoma of the breast with widespread metastasis. *Am J Cancer* 34 233~266 (1968)
- 14) McCarty, K.S., et al.: Adenosquamous differentiation in mammary carcinoma. *Arch Pathol Labo Med* 104 130~133 (1980)

## 雑 報

## 編 集 後 記

## ○編集担当幹事会

日時 昭和60年3月4日(月)午後4時  
 場所 学術室  
 議題 東京女子医科大学雑誌55巻5号  
 査読結果審議  
 その他

## ○集会担当幹事会

日時 昭和60年3月12日(火)午後4時半より  
 場所 学術室  
 議題 今後の例会のあり方について  
 彌生メモリアルレクチャーについて  
 第51回総会について(特別講演, シンポジウ  
 ム, 教育講演決定)  
 その他

3月4日(月)午後4時から学会室において女子医大誌55巻5号の編集会議が行なわれた。十字教授司会のもとに7編の査読結果について審査し、4編が無条件、3編が条件つきで受理された。ほかには、各論文ごとに表紙左上に原著・臨床報告などの区分名を記載すること、投稿論文の指導者は原則として査読を担当しないことなどがきまった。

幹事会終了後、編集委員長の十字教授が東大輸血部教授として母校に帰られることになったので、ささやかな送別会を催し、先生の門出を祝した。先生には短期間ではあったが、査読のシステムを軌道にのせるなど、学会誌の質的向上に御力添えをいただき、学会としてはまことに残念である。先生の今後の発展を祈る次第である。

後任には対馬敏夫教授(内分泌内科)が決定した。

(3月12日記 M.K.)

# 一 力 カ ロ リ ー 高 脈 静 中 心 経

健保  
適用

高カロリー輸液を中心とした栄養管理を安全に実施できるよう、製剤上の問題点を解決しました。

## ●適応症

経口、経腸管栄養補給が不能または不十分で経中心静脈栄養に頼らざるを得ない場合の水分、電解質、カロリー補給に用います。

●成分中のCaとPの反応を避けるため(加熱滅菌時)A液、B液に分け、交互に投与するようにしてあります

●用法・用量、使用上の注意は添付文書をご参照ください。

## パレメンタールA パレメンタールB

■日本人の1日栄養所要量を基準にブドウ糖、電解質を配合してあります

■本剤を用いて高カロリー輸液を調製する場合、混合の回数が少なく調製時間の短縮、労力の減少、細菌汚染及び微粒子混入の機会の減少をはかることができます

●包装：パレメンタールA 400ml×10V  
 パレメンタールB 400ml×10V



製造発売元

森下製薬株式会社

大阪市東区道修町4丁目29番地

輸  
液  
用  
基  
本  
液

## 東京女子医科大学学会会則

(雑誌の発行・編集に関する条項抜萃)

第3条 本会の目的を達するため次の条項を行なう。

1. 集会 2. 雑誌発行

第10条 幹事は会長が指名し、会計、集会、編集、その他の事務を分掌する。

第13条 本会の雑誌を「東京女子医科大学雑誌」と称し、年12回もしくは11回発行し、本会会員に配布する。

## 東京女子医科大学雑誌投稿規定

(昭和60年1月1日改訂)

1. 投稿の資格 投稿者は共同執筆者を含め本会会員に限る。

2. 投稿内容 本誌は原著(和文、または英文)、総説、臨床報告、調査報告、集会記録・報告などを掲載する。いずれも未発表のものに限る。

3. 経費 原著は刷上り1編につき4頁(図、写真、表、込みで400字詰16枚に相当)まで、報告(臨床、調査)、英文原著などは2頁までの経費を学会が補助する。超過頁分、アート紙、カラーアート、図、写真、トレース代、別刷代等の実費は著者負担とする。但し表は合計して2頁分(報告は1頁分)は学会が補助する。特別掲載は全額著者負担とする。

依頼原稿は全額学会負担とし、別刷50部を無料とする。

### 4. 寄稿細則

1) 寄稿カード 本学会所定の寄稿カードに必要事項を記入して添付する。

2) 原稿はコピーを一部添えて提出する。

3) 表紙 原稿には表紙をつけ、次の項目を記入する。

標題・著者の所属・主任あるいは指導者名(所属が2カ所ある場合は列記、あるいは一方を脚注とする)・著者の姓名(上つきでフリガナ)・別刷(著者実費)請求部数(単位50部、左余白に朱書)。

4) 抄録 原著および総説の原稿には英文抄録(約200語をダブル・スペースでタイプする)とその和訳をつける。英文・和文の内容は一致させる。英文抄録の冒頭には標題・著者名(姓は大文字)、所属(主任あるいは指導者名)

を記載する。

臨床報告、調査報告などは英文抄録不要、但し、脚注とするため、著者名(姓は大文字)・所属・標題の順に英訳を別紙に記載して、添付する。

### 5) 本文

(1) 和文 平易な文体で簡明に表現し、文字は常用漢字、ひらがな、現代かなづかいを用い、楷書で明瞭に書く。句読点を正しく、はっきり付ける。文中の欧文文字はタイプ、または活字体とする。

原稿はA4版、横書400字詰原稿用紙にペン、またはボールペンで書く。

ワープロ原稿はA4サイズ用紙を用い、上下3cm、左右2cmのマージン内に横書、40字×20行。

(2) 英文 簡明に表現する。論文の構成、その他寄稿細則は和文に準ずる。A4版タイプ用紙にダブル・スペースでタイプする。

英文論文には必ず和文抄録を添付する。

6) 論文の構成 原著、総説、臨床(調査)報告などの構成は、原則として、緒言(はじめに、目的)・方法(資料、対象)・結果(成績、症例)・考察・総括(まとめ、要約)・結論(結語、むすび、おわりに)および文献(引用文献に限る)とする。

7) 項目 本文の章、節、項目分けは、原則としてI, 1., 1), (1), ①…とする(第1章、第1節、第1項などとしなない)。また、A., a., a) …等を用いてもよい。

8) 数字 文中の数字はアラビア数字を用いる。単位は原則としてCGS単位(km, m, cm, mm,  $\mu$ , nm, km<sup>2</sup>, m<sup>2</sup>, cm<sup>2</sup>, mm<sup>2</sup>, m<sup>3</sup>, cm<sup>3</sup>, mm<sup>3</sup>, l, dl, ml,  $\mu$ l, kg, g, mg,  $\mu$ g, s, ms,  $\mu$ s, min, h, d等)。

9) 用語 主として文部省学術用語に従い、専門用語は学会で統一されている用語を用う。文中に度々繰返される語は略語を用いてもよいが、その場合は、最初に掲出される語は省略せず、後出の同語は略語を使用する旨、但し書きする。

外国の人名、地名は原語(タイプか活字体)で書き、日本語化している外来語は片カナで書く。文中の欧米語は固有名詞、商品名、表題、独語の名詞を除き、小文字で書く。

10) 図, 表, 写真 図, 表, 写真は本文とは別紙とする。図は図 1, 図 2… (Fig. 1, Fig. 2…), 表は表 1, 表 2… (Table 1, Table 2…), 写真は写真 1, 写真 2… (Photo 1, Photo 2…) のように番号をつける。

図, 表, 写真には, 番号と共に, 必ず表題をつける。図, 写真の表題は下に, 表の表題は上に記入する。

写真は手札版が望ましく白黒明瞭なものに限る。アート紙の場合は刷上り実寸大のもの, 電頭写真にはバーを入れる。

スライド焼付の図は原図を添付する。原図および表の大きさは A 4 版以内とし, 白紙あるいは青色方眼紙に黒色で明瞭に書く。

原色版 (カラーアート紙) はスライドを添付する。実費は著者負担とする。

提出された図, 表が印刷に耐えない場合は, 改めて図, 表を作製し直すことがある。その実費は著者負担とする。図, 表および写真の挿入箇所は, 本文原稿右側欄外に, 図, 表, 写真の番号を明記して示す。

## 11) 文献

### (1) 引用文献

論文に直接関連する文献に限り, 引用順に一連番号をつけて, 論文末尾に記載し, 本文中の引用箇所には, 右上肩に片カッコを付した番号で示す。

### (2) 雑誌名

文献に掲出する雑誌名は, 略さないのが望ましい。略名を用いる場合は, 外国誌は, Index Medicusにより, 和雑誌は, 各誌の表紙に示してある略名による。

### (3) 文献引用例

#### a. 雑誌論文の引用

著者名 (必要数): 論文名, 雑誌名 巻数 (号数) 引用通巻頁数 (a~m) (発行年) の順序とする。巻 (号) 頁 (年) の間に, 「,」は不要。

著者・共同研究者名は, 姓—family name—, 名前—first name, middle name—, の順に, 日本人名は姓, 名前の順に列記する。名前は頭文字 1 字でもよい。

共著者多数の場合は, 「・ほか」または「et al.」と省略してもよい。

例 i) 松林花子・ほか: 要保護女子における精神障害の実態と長期経過観察例。東女

医大誌 51 (6) 531~552 (1981)

例 ii) Vaughn, K.C., and Duke, K.C.: Histo-chemical localization of nitrate reduct-ase.

Histochemistry 72(2) 191~198 (1981)

例 iii) Spathas, D.H. et al.: Polyamine transport in aspergillus nidulans. J Gen Microbiol 128(3) 557~563 (1982)

#### b. 単行本あるいは叢書の一部からの引用

著者または編集者名, 翻訳者名: 書名, 版次 引用頁 (b~n) 発行書店名 発行地 (発行年) [編者名: 叢書名 巻数 巻名 版次 引用頁 (b~n) 出版書店名 発行地 (発行年)] の順とする。

例 iv) 杉山竹夫: 医学免疫学, 第 2 版 東京大学出版会 東京 (昭 57) 80~83

例 v) Valtin, Heisz, 飯田喜俊監訳: 腎臓病—病態生理と臨床。53 頁, メディカル・サイエンス・インターナショナル 東京 (1982)

例 vi) Campbell, Charles D.: Aneurysms surgical Therapy. 47~78. Futura, Mount Kisco (1981)

例 vii) Blasecki, John W.: Mechanisms of Immunity to Virus-Induced Tumors [Immunology series 12] 96~98. Marcel Dekker, New York (1981)

5. 雑誌の編集・発行 編集委員会は編集幹事によって構成され, 本誌の編集・発行に関する責任と権限をもつ。

編集委員会は投稿原稿を査読し, 採否を決定する。編集委員会は原則として毎月 1 回開催する。論文の掲載は受付順を原則とする。

本誌の発行は年 12 回, もしくは 11 回とする。

6. 校正 初校・再校は著者校正を原則とする。大幅な改変や訂正は許されない。

7. 別刷 別刷は著者実費, 50 部単位で申込みを受ける。発行後の追加は認められない。

#### 8. 寄稿の宛名

〒 162 東京都新宿区河田町 10 番地

東京女子医科大学学会編集幹事宛

(事務所は東京女子医科大学図書館学術室内)

Tel. 03 (353) 8111 内線 2233

編 集 委 員

|             |           |
|-------------|-----------|
| 井 口 登 美 子   | 串 田 つ ゆ 香 |
| 石 井 妙 子     | 門 間 和 夫   |
| ◎十 津 澄 子    | 竹 木 敏 茂   |
| 小 林 猛 夫 郎   | 田 宮 村 敏 敦 |
| 小 暮 美 津 子   | 東 間 敏 和   |
| ○神 津 忠 彦    | 對 馬 敏 和   |
| 日 下 部 き よ 子 | 横 田 敏 和   |

ABC順

昭和60年5月20日 印 刷  
昭和60年5月25日 発 行

東京都新宿区河田町10番地  
東京女子医科大学図書館内

発行所 東京女子医科大学学会

電話 03 (353) 8 1 1 1 番 (代表)  
内線 2233 番

〒162 東京都新宿区河田町10番地  
東京女子医科大学図書館内

編 集 兼 吉 岡 守 正  
発 行 者

電話 03 (353) 8 1 1 1 番 (代表)  
内線 2233 番

〒114 東京都北区西ヶ原3丁目46番10号

印 刷 者 向 喜 代 次

印 刷 所 株式会社 杏 林 舎

電話 03 (910) 4311 (代表)

東京女子医科大学雑誌規定

○会費払込は振替口座「東京5-4342」東京女子医科大学学会宛のこと

○会費は毎年1月中に払込まれること

|              |             |
|--------------|-------------|
| 会 費 (購読料)    | 売 価         |
| 1カ年 金 6,000円 | 1部 金 1,000円 |

〒113 東京都文京区本郷3丁目35番6号大石グリーンビル3階

広 告 株式会社 大 矢 商 会  
取 扱 者 電話 03 (813) 7031~4 番